（「国語学」166集　1991・9・30）

近世唐音と『東音譜』

森　博達

キーワード：近世唐音・音訳漢字・唐通事・ハ行頭音・新井白石

要旨

新井白石著『東音譜』「五十母字音釋」は、長崎の唐通事が日本語の五十音を四種の漢語方音によって音訳したものである。

白石は「杭泉漳福各州音」によると称するが、その「漳音」によるとされる音訳は閩南語の特徴を備えておらず、同じ十八世紀初頭の岡嶋冠山（長崎出身）の官音とよく符合する。唐通事の間では、漳泉両音は別箇の方音とは見なされておらず、長崎では官話・杭州・福州・漳州の音が学ばれていたといわれる。『東音譜』の「漳音」は官音の誤りである。

この官音による五十音の音訳と冠山の官音資料を対照することによって、当時の長崎のハ行頭音が唇音であったことが判明する。また、当時の閩南語と閩北語には現代と同じく、f-系統の声母が存在していなかったことも明らかとなる。

一、はじめに

日中間の音韻の交渉を通して両国の音韻史をたどる場合、主要な資料として二種のものが挙げられる。第一種の資料は日本語を漢字の音によって表記したものであり、第二種の資料は、逆に、漢字の音を日本語によって表記したものである。この二種類の資料は、従来はそれぞれ別箇に研究されることが多かった。しかし、この両者を切り離すことなく、総合することによって、より精確な音価推定が可能になると考えられる。近世音については、この試みを実行する絶好の資料が存在する。

新井白石著『東音譜』（享保四年、一七一九年自序）の「五十母字音釋」は、これまで本格的な研究がなされていないが、長崎弁の五十音を漢語の四種の方音によって音訳するという、きわめて貴重な音韻資料である。白石によれば、音訳に用いられた「杭泉漳福各州音」は、「長崎市舶務各州都通事所」（凡例）という。本稿では、まず、その中で「漳音」とされているものが、実際には南京官音の誤りであることを明らかにする。ついで、この「音釋」を主要資料（前述の第一種資料）とし、長崎出身の岡嶋冠山の唐音を副次資料（前述

の第二種）として、十八世紀初頭における長崎方言と漢語諸方言の音韻状況の一端を窺いたい。

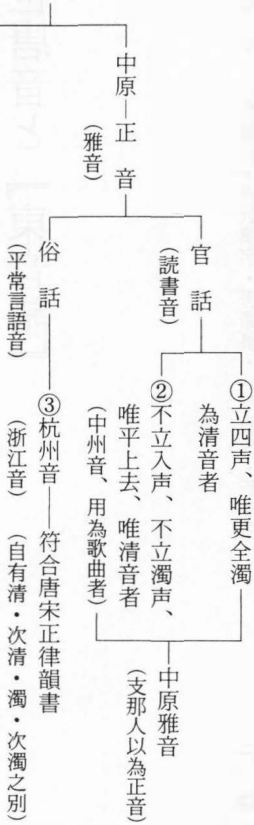
二、近世唐音

二・一　文雄による分類と冠山の唐音

近世日本に伝来した唐音の種類は多様である。無相文雄は『三音正譌』（宝暦二年、一七五二年刊）の「華音」の条で次のように述べている。

> 華音者俗所謂唐音也。其音多品。今長崎舌人家所レ學有二官話杭州福州漳州不レ同。彼邦輿地廣大。四方中國音不レ齊。中原爲二正音一。亦謂二之雅音一。四邊爲二俗音一。亦謂二之鄉音一。其中原所レ用之音有二二類一。官話之與二俗話一也。俗話者平常言語音也。官話者讀書音此之用。其官話亦有レ二。一立二四聲一、唯更二全濁一爲二清音一者是也。一不レ立二入聲一不レ立二濁聲一、唯平上去唯清音者謂二之中州韻一。用爲二歌曲音一。二種通稱二中原雅音一。支那人以爲二正音一。其俗話者杭州音也。亦曰二浙江音一。（中略）其浙江音也、以レ予觀レ之、皦如正音哉。以レ符二合唐宋正律韻書一也。

文雄による華音（唐音）の分類は次のように図示できる。



いま、冠山の唐話資料について見ると、①の官話（読書音）の特徴は、『唐音雅俗語類』および『唐譯便覧』（ともに享保十一年、一七二六年刊。両者とも各巻首に「毎字註二官音一并點二四聲一」と記されている）等に付された唐音と符合する。

これに対し、『唐話纂要』（享保三年、一七一八年重刊）の付音は、有坂秀世氏「江戸時代中頃に於けるハの頭音について」によれば、杭州音であるとされている。しかし実際には、この『唐話纂要』の巻五所収の「小曲」の付音は、②の中州音（歌曲の音に用いられるもの）の特徴とほぼ符合するのである（ただし、この「小曲」の付音には「愁」を「ヅヱ○ウ」とするなど、杭州音が一部混入しており、純粋な中州音とはいえない）。つまり、この「小曲」を除いた箇処が③の杭州音（浙江音）の特徴と符合するものと言わねばならない。

二・二　漳州音と泉州音

文雄の右の記述によれば、長崎の唐通事の間で学ばれた華音には、官話・杭州・福州・漳州という四種のものがあった。ところが、『東音譜』「五十母字音釋」の音訳は、白石によれば杭州・泉州・漳州・福州の四種の華音によるものとされる。

現代の漳州音と泉州音は、閩語の中でもともに閩南語に属し、両者の差異は小さく、相互に十分通じ合う方音である。また、江戸

時代の長崎唐通事の間でも、両者は同一の方音と見なされていたようである。

たとえば、『譯司統譜』によれば、内通事小頭は寛文六年に始めて置かれたが、その内わけは、南京方が二人、福州方が二人、泉州方が三人の計七人である。また、同じく正徳三年正月廿三日の条には、内通事小頭の重任者として泉州方二人、新任者として南京方二人の名が見える。南京・福州・泉州の三方しかなかったことがわかる。

また、『唐通事会所日録』の巻四によれば、宝永二年十月廿七日の条に、唐人屋敷詰番の「南京方」と「漳州方」の候補として、それぞれ四名が挙げられている。この「漳州方」の四名のうち、鄭長左ヱ門と富永四郎左ヱ門はこのときには落選したが、同三年七月廿八日条では、唐人屋敷詰番の泉州内通事二人の明跡について、「泉州平内通事」としての右の鄭・富永両名が補充候補に挙げられているのである。

おそらく、「漳州方」と「泉州方」は、時によって呼称が異っても、その実体は一つだったのであろう。文雄が「今長崎舌人家所レ學有二官話杭州福州泉州不レ同」として、「泉州」の他に「漳州」を挙げなかった理由もそこにあると考えられる。それならば、白石が「杭泉漳福各州音」として泉州音と漳州音とを相異なる方音と見なしていることが問題となる。また、文雄が挙げている官音を白石が挙げていないことも問題となる。

二・三　南京音と南京官音

右で見たように、『唐通事会所日録』や『譯司統譜』によれば、長崎の唐通事の間では、南京・福州・泉州（漳州）の三種の唐音が行われていたことがわかる。しかし、文雄は「南京話」ではなく、「官話」と「杭州」を挙げている。それでは、唐通事の「南京音」「南京話」とは一体何なのか。

西川如見の『華夷通商考』の巻一には、「南京」の条に次のような記述がある。

> 詞十五省共此國ノ詞ヲ以テ上トス。日本ニテ山城ノ詞ヲ上トスルガ如シ。今日本ニテ讀來ル字韻南京同音ノ文字多シ。唐土ニテ詞ヲ謡フニモ此國ノ音律ヲ以テ本トス。

また、同じく「浙江省」の条には次のような記述がある（圏点は森）。

> 城下ヲ杭州府ト云、春秋ノ時ノ越ノ國也。南京ニ同ジキ上國ナリ。（中略）人物風俗南京ニ同ジ。詞南京ニ替リナシ。

さらに、文雄の『磨光韻鏡・餘論』には次のような記述が見られる。

> 杭州音者明太祖中華定爲二十五省一、今清人亦仍レ之。其浙江省有二杭州府一。春秋時越國也。與二南京應天府一相隣（其間相去本邦道規三十五里）。人物語音與二南京一同。故杭州音亦曰二南京音一。南京古呉國也（見華夷通商考）。相傳中華第一正音也。

つまり、南京の語音は、文雄が正音と見なす杭州音であるというのである。南京では、俗話（平常言語音）としては杭州音が用いられ、公的な場では官話が用いられていたのであろう。現代の北京語と普通話との関係のようなものではなかったかと推測されるのである。

ちなみに、篠崎東海の『朝野雑記』に享保元年十一月二十二日の「長崎通事唐話会」の会話の記録がある。福州話・漳州話・南京話の三方言で問答せられたもので、石崎又造氏の『近世日本に於ける支那俗語文学史』にその全文が録されている。その南京話の会話は延べ30人の問答から成る。中古全濁音字に着目すると〈匣〉母字および

表 1. 「杭音」

	ア 列		イ 列		ウ 列		エ 列		オ 列	
ア	阿 ア a$^{2^6}$	歌開一 影平	伊 イ i^{1}	脂開A 影平	烏 ウ u^{1}	模開一 影平	爺 ヱ (ia^{2})	麻開三 以平	倭 (o^{u1})	戈合一 影平
カ	哈 ハ	麻開二 暁平	幾 キイ tɕi	微開三 見	古 クウ ku^{3}	模開一 見上	揭	薛開B 溪入	歌 コウ ko^{u1}	歌開一 見平
サ	沙 サア sa^{1}	麻開二 生平	悉 ɕie$^{2^6}$	質開三 心入	四 スウ sɿ^{4}	脂開三 心去	捨 セヱ シエ sui^{3}	麻開三 書上	娑	歌開一 心平
タ	他 タア t'a^{1}	歌開一 透平	執 チ tse$^{2^6}$	緝開三 章入	咨 ツウ tsɿ^{1}	脂開三 精平	忒 テ	徳開一 透入	多 トウ to^{u1}	歌開一 端平
ナ	那 ナア	歌開一 泥去	儞 ニイ ni^{3}	之開三 娘上	奴 ノウ nu^{2}	模開一 泥平	捻	帖開四 泥入	儺 (na^{2})	歌開一 泥平
ハ	花 ハア xua^{1}	麻合二 暁平	非 フイ fi^{1}	微合三 非平	敷 フウ fu^{1}	虞合三 敷平	靴 ɕy^{1}	戈合三 暁平	(訃) fu^{4}	虞合三 敷去
マ	麻 マア ma^{2}	麻開二 明平	靡 ミイ (mi^{2})	支開B 明平	暮 モウ mo^{u3}	模開一 明去	滅 mie$^{2^7}$	薛開A 明入	摩 モウ mo^{u2}	戈合一 明平
ヤ	啞 ia^{3}	麻開二 影上	咿 イ (i^{1})	支開A 影平	柚 ユウ (iɸ^{3})	尤開三 以去	越 ye$^{2^7}$	月開三 云入	欲 ヨ ye$^{2^7}$	燭合三 以入
ラ	臘 la$^{2^7}$	盍開一 来入	梨 リイ li^{2}	脂開三 来平	盧 ロウ (lu^{2})	模開一 来平	列 lie$^{2^7}$	薛開三 来入	羅 ロウ lo^{u2}	歌開一 来平
ワ	哇 (ua^{1})	麻合二 影平							窩 o^{u1}	戈合一 影平

「是」字を除く)、23番目までは、6番目の中村伊右衛門の発話で「白」と「蜀」に濁音仮名が付されている外は、すべて清音となっている。ところが24番目以降は23例中14例までが濁音表記されている。公的な南京官話で会話を交していたが、終りに近づいて、俗話(平常言語音)である杭州音が顔をのぞかせたものと推測される。

三、『東音譜』「五十母字音釋」

三・一 テキストと音訳の年代

『東音譜』「五十母字音釋」の音訳漢字を分析するに当って、『新井白石全集』第四巻所収本を底本とする。ただし、「ホ」の「杭音」は暫く「一本訃」とあるのに従う。また、底本では「へ」に対して「泉福並音分」とあるが、「分」字のように中古鼻音韻尾をもつ文字は他に用例を見ない。『武道摭萃録』(京都大学所蔵)の巻三二七所収本など、「兮」字に作る本に従うことにする。なお、この『武道摭萃録』所収の『東音譜』には、篠崎東海による享保十八年正月五日の跋文が付せられており、その冒頭には、

白石先生嘗著二東雅一二十巻一、辨二我方言一。爲二至詳一矣。後又編二是譜一、附二之東雅之後一。釋英賢示レ之、予寫而藏焉。

表 2.　「漳音」

	ア　列		イ　列		ウ　列		エ　列		オ　列	
ア	阿 アツ ɐ^{5}	歌開一 影平	移 イ、 i^{2}	支開三 以平	烏 ウ、 u^{1}	模開一 影平	爺 エ、 ie^{2}	麻開三 以平	倭 ヲウ ɔ^{1}	戈合一 影平
カ	加 キヤア tɕiɐ^{1}	麻開二 見平	雞 キイ (tɕi^{1})	斉開四 見平	孤 クウ ku^{1}	模開一 見平	茄 tɕ'ie^{2}	戈開三 群平	科 コウ k'ɔ^{1}	歌開一 溪平
サ	沙 サア、 ʂɐ^{1}	麻開二 生平	詩 スウ (ʂʅ^{1})	之開三 書平	私 スウ sʅ^{1}	脂開三 心平	蛇 セエ、 ʂə^{2}	麻開三 船平	蘇 ソウ su^{1}	模開一 心平
タ	他 タア、 t'ɐ^{1}	歌開一 透平	遲 チイ tʂ'ʅ^{1}	脂開三 澄平	慈 ツウ (tsʅ^{2})	之開三 從平	爹 テイ te^{1}	麻開三 知平	多 トウ tɔ^{1}	歌開一 端平
ナ	拿 ナア、 lɐ^{2}	麻開二 泥平	疑 ニイ	之開三 疑平	奴 ノウ lu^{2}	模開一 泥平	藥 子ツ	薛開B 疑入	糯 ノウ lɔ^{4}	戈合一 泥去
ハ	發 ハツ (fɐ^{5})	月合三 非入	非 フイ fəi^{1}	微合三 非平	夫 フウ fu^{1}	虞合三 非平	弗 ホツ fu^{5}	物合三 非入	福 ホツ fu^{5}	屋合三 非入
マ	麻 マア、 mɐ^{2}	麻開二 明平	迷 ミイ mi^{2}	斉開四 明平	母 モウ mu^{3}	侯開一 明上	滅 メツ me^{5}	薛開A 明入	摸 モウ mɔ^{1}	
ヤ	牙 ヤア、 iɐ^{2}	麻開二 疑平			由 ユウ iəu^{2}	尤開三 以平			欲 ヨツ (y^{5})	燭合三 以入
ラ	喇 (lɐ^{5})	曷開一 来入	离 リイ li^{2}	支開三 来平	而 ルウ (ər^{2})	之開三 日平	列 レツ le^{5}	薛開三 来入	羅 ロウ lɔ^{2}	歌開一 来平
ワ	哇 ワア、 (uɐ^{1})	麻合二 影平								

とある。

ところで、『東音譜』の各州音は、長崎市舶務の各州都通事が填記したものということであった。この「都通事」とは大通事を指すのであろう。白石は八代将軍吉宗の登場によって失脚する以前にこの音訳を入手していた可能性が高い。

白石の『采覧異言』（正徳二年、一七一二年刊）凡例には、

我今所レ譯、其端在二於別音一。凡音音所レ象、一如二琴之有一レ譜。按レ譜求レ音、則殊方之言可レ盡也。若二其義例一、具二詳于譜一。故不レ贅焉。

とある。この中で言及されている「譜」とは、『東音譜』あるいはその藍本である可能性が高い。

ちなみに、正徳元年の大通事は、『譯司統譜』によれば、彭城仁右ヱ門・二木仁兵衛（先名金右ヱ門）・彭城藤治ヱ門・頼川藤七の四名であった。

三・二　各州音訳一覧表

「杭泉漳福」の各州音ごとに「五十母字音釋」の音訳字をまとめ、各州音訳一覧表を作成する。表1～表4のとおりである。四表とも体例は同

表 3.　「泉音」

	ア　列		イ　列		ウ　列		エ　列		オ　列	
ア	鴉 a	麻開二 影平	以 ˇi	之開三 以上	宇 (ˇu)	虞合三 云上	曳	祭開三 以去	奥 o˃	豪開一 影去
カ	加 (カア) ka ㇔	麻開二 見平	其 (キイ) ≤ki	之開三 群平	句 クウ ku˃	虞合三 見去	啓 ˇk'e	斉開四 溪上	可 コウ ˇk'o ㇔	歌開一 溪上
サ	沙 sa ㇔	麻開二 生平	是 シイ si˃	支開三 常上	胥 (su)	魚開三 心平	世 se˃ ㇔	祭開三 書去	鎖 ˇso	戈合一 心上
タ	他 ˇt'a	歌開一 透平	之 (チイ) ˇtsi	之開三 章平	子 (ツ) ˇtsu ㇔	之開三 精上	體 t'e ㇔	斉開四 透上	討 ˇt'o	豪開一 透上
ナ	那	歌開一 泥去			奴 ≤nɔ	模開一 泥平			老 ˇlo ㇔	豪開一 来上
ハ	花 hua ㇔	麻合二 暁平	希 (ヒイ) hi	微開三 暁平	夫 hu ㇔	虞合三 非平	兮 へ (≤hez)	斉開四 匣平	好 ˇho 白	豪開一 暁上
マ										
ヤ	也 ヤ ia˃ 白	麻開三 以上			有 ウ ˇiu ㇔	尤開三 云上				
ラ	獵 la˃ 白	葉開三 来入	利 li˃ ㇔	脂開三 来去	呂 lu˃	魚開三 来上	禮 ˇle	斉開四 来上	勞 ≤lo	豪開一 来平
ワ	哇 (ua)	麻合二 影平								

じで、五十音図の枠組の各音節内は、左に音訳字、その右の上方に唐音、下方に現代音、そしてこれらの右に中古音類を記入した。なお、唐音および現代音のうち、類推によるものは()で括った。

表1の「杭音」の唐音は岡嶋冠山『唐話纂要』(「小曲」を除く)の唐音であり、前述のように杭州音とされている。現代杭州音は遠藤光暁氏「杭州方言の音韻体系」(『均社論叢』16、一九八九年)によって記入した。音声記号の右肩の数字は声調を示し、1～6はそれぞれ陰平・陽平・上声・去声・陰入・陽入を表わす。

表2の「漳音」は、次節で論じるように、実際には官音によって音訳されたものである。そこで、唐音は冠山の『唐音雅俗語類』および『唐譯便覧』の官音を記入した。また、現代音は趙元任氏「南京音系」(中国科学社刊『科学』13―8、一九二九年)の南京音を記入した。音声記号の右肩の数字1～5は、それぞれ陰平・陽平・賞(上)・去・入の声調を示す。

表3の「泉音」の一覧表には、篠崎東海『朝野雑記』に収められた「長崎通事唐話会」の「漳州話」に付された唐音を記入した。ただし、石崎又造氏『近世日本における支那俗語文学史』(清水弘文堂、一九六七年)に録されたものをテキストとした。

表 4.　「福音」

	ア　列		イ　列		ウ　列		エ　列		オ　列	
ア	亞 ˇa	麻開二 影去	以 ˇi	之開三 以上	無 ムアフ ˌu	虞合三 微平	移 ˌie	支開三 以平	倭 (アフ) (ˌuɔ)	戈合一 影平
カ	加 カア ˌka	麻開二 見平	其 (キイ) ˌki	之開三 群平	古 クウ ˇku	模開一 見上	桂 kieˋ	齊合四 見去	可 ˇk'ɔ	歌開一 溪上
サ	沙 (サア) ˌsaˀ	麻開二 生平	是 スイ seiˋ	支開三 常上	所 ˇsuˀ	魚開三 生上	世 スエ sieˋ	祭開三 書去	鎖 ˇsɔ	戈合一 心上
タ	他 ˌt'a	歌開一 透平	之 (チイ) ˌtsi	之開三 章平	助 tsouˋˀ	魚開三 崇去	體 ˇt'ɛ	齊開四 透上	桃 トフ ˌt'ɔ	豪開一 透平
ナ	那	歌開一 泥去	二 ニイ nei˧	脂開三 日去	奴 ˌnu	模開一 泥平	泥 ˌnɛ	齊開四 泥平	惱 ノフ ˇnɔ	豪開一 泥上
ハ	花 フア ˌxua	麻合二 暁平	非 ˌxi	微合三 非平	乎 (フウ) (ˌxuˀ)	模開一 匣平	兮	齊開四 匣平	和 ˌxuɔ	戈合一 匣平
マ	馬 マア ˇma	麻開二 明上	米 ミイ ˇmi	齊開四 明上	母 ムウ muˀ	侯開一 明上	買 ˇmɛ	佳開二 明上	毛 モフ ˌmɔ	豪開一 明平
ヤ	也 ˇiaˀ	麻開三 以上			有 ˇieuˀ	尤開三 云上			裔	祭開三 以去
ラ	喇 laʔˌ	曷開一 来入	利 (リイ) leiˋˀ	脂開三 来去	魯 ˇlu	模開一 来上	禮 ˇlɛ	齊開四 来上	羅 ロフ ˇlɔ	歌開一 来平
ワ	哇 (ˌua)	麻合二 影平								

また、現代音は北京大学中国語言文学系語言学研究室編『漢語方音字彙』第二版（文字改革出版社、一九八九年）の厦門音を記入した。

表4の「福音」の一覧表に記入した唐音は『廣幼略記』の福州音。現代音は『漢語方音字彙』第二版の福州音を記入した。

三・三　各州音の同定

各州音の音訳字の中古音における声調および清濁の類別統計表を作成すると、表5～表8のとおりである。

中古全濁音字は「杭音」では一切用いられていない。このことは、「杭音」が現代音と同様、中古全濁音字が有声音であったことを示している。

中古入声字は、「泉」・「福」両州音ではともに一字ずつしか用いられていない（「泉音」の「臘」と「福音」の「喇」）。しかも、この二字の韻尾は、現代音では入声韻尾 -p・-t・-k に比べて軽微な声門閉鎖音ʔなので、あまり耳立たない。

これらに対して、「杭音」では中古入声字が10字も用いられている。表1に記入した『唐話纂要』の唐音によって知られるように、当時の杭州音の入声は母音が短く、韻尾は消失していたか、残っていたとしてもきわめて微弱だったからであろう。また、イ列で「シ」と「チ」にの

は現代音でも閩北語に特有の対応である〔支〕韻字は現代閩北語でe類の主母音をもつ)。

「泉音」および「福音」の一覧表では、音訳漢字の閩南・閩北それぞれの現代音も、当てられている日本語の各音節によく合致している。

三・四　「漳音」は官音の誤り

問題は、表2の「漳音」によるとされる音訳にある。

漳州は泉州と隣接し、その方言は両者とも閩語の中でも閩南語に属する。それにもかかわらず、この「漳音」の音訳では閩南語に共通する非鼻音化の現象が反映されていない。また、入声字が多用され、蟹摂三四等韻字がエ列ではなくイ列に用いられているなど、韻母と日本語の母音との対応関係も、表3の「泉音」ではなく表1の「杭音」に類似している。

前述のように、文雄は長崎唐通事の唐音として、官音・杭州・福州・漳州の各音を挙げているが、これによれば『東音譜』の「漳音」は官音の誤りである蓋然性が大きい。表2の「漳音」の一覧表に記入した冠山の官音と現代南京音を見れば、これらの音が五十音図の各音節とよく符合していることがわかる。「カ」に「加」字が用いられているのは一見不適当と思われるが、現代南京音系にka類の音節が存在せず、また冠山の官音の体系にも「カアゝ」類の音が存在しないことを知れば、「加」字を用いたのがやむを得ない処置であったことがわかる。このように、例外に見える音訳もすべて正当な理由がある。

内外の徴証から見て、『東音譜』の「漳音」が官音(南京官音)の

表7

「泉」	平	上	去	入	計
清	12	7	3	0	22
次濁	1	7	3	1	12
全濁	1	1	0	0	2
計	14	15	6	1	36

表5

「杭」	平	上	去	入	計
清	18	4	2	4	28
次濁	9	1	3	6	19
全濁	0	0	0	0	0
計	27	5	5	10	47

表8

「福」	平	上	去	入	計
清	9	5	3	0	17
次濁	6	10	4	1	21
全濁	4	1	1	0	6
計	19	16	8	1	44

表6

「漳」	平	上	去	入	計
清	17	0	0	3	20
次濁	12	1	1	6	20
全濁	4	0	0	0	4
計	33	1	1	9	44

み入声字が用いられている(「悉」と「執」)が、これは、陰声韻尾字では原則として「スウ(思)」・「ツウ(支)」となるからである。

表3の「泉音」の一覧表では、マ行とナ行に音訳字の欠落があるが、これは閩南語の特徴である中古鼻音声母の非鼻音化(denasalization)に起因する。エ列に蟹摂三四等韻(〔斉〕韻・〔祭〕韻)の字が専用されているのも閩語の特徴である。また、表4の「福音」の一覧表では〔支〕韻の「移」字がエ列音(エ)に用いられているが、これ

誤りであることは明白である。

三・五　長崎のハ行頭音

「漳音」すなわち南京官音による音訳には、なるだけ平声字を用いようとする姿勢が窺える(表6参照)。入声字以外では、上声の「母」字と去声の「糯」字が例外となるが、これらは適当な平声字が見つからなかったためであろう。入声字については、声母・韻母とも最適な陰声韻尾字がない場合に用いられていると推測される。

この官音による五十音図の音訳は、その態度が厳密であり、また、同じ時代に官音を日本語(長崎方言)で表記した冠山の唐音資料があり、そのうえ現代南京音の体系的な報告もある。『東音譜』によって音価推定を行う際に、各州音の中で根幹となるべき資料である。

この官音による音訳(表2)では、ハ行音にはすべて〈非〉母字が用いられている。〈暁〉母平声には、「𠯿ヒイ」(〈之〉韻)・「希ヒイ」(〈微〉韻)・「呼フウ」(〈模〉韻)・「訶ホウ」(〈歌〉韻)など、それぞれハ行音で写されている官音がある。ところが実際にはこれらの〈暁〉母字を一切用いず、〈非〉母字によってハ行音を音訳しているのである。ここから、長崎の「ヒ」・「フ」「ホ」の頭音が [h] よりも [f] に近い音であったことがわかる。また、冠山の官音では「非」字に「フイ」と付音されているところから、当時の「非」字の官音は [fi] ではなく、[fei] のように二重母音をもっていたものと推測される。

「ハ」には〈暁〉母合口平声の「花」字(官音ハァ、現代音 hua)を用いず、入声であるにもかかわらず〈非〉母の「發」字を用いている。また、「ヘ」にも〈非〉母入声の「弗」字を用いている。以上によって、十八世紀初頭の長崎のハ行頭音はすべて [h] よりも [f] に近い子音であったことが判明する。

このように、当時の長崎のハ行頭音は唇音であったと推定されるのであるが、表3の「泉音」と表4の「福音」では、ハ行音に対して軽唇音声母字よりも喉音声母字の方が優勢となっている。(二対八)。ここから、当時の閩語は閩南・閩北とも現代音と同様に、f-系声母が存在していなかったものと推測されるのである。

四、おわりに

一例としてハ行頭音の音価推定を行ったが、ここで用いた方法によれば、他の音価の推定も従来より精確なものとなる。

冒頭で提唱した音韻史研究方法の重要さを、近世音を例にとって明らかにしようとした次第である。

(了)

〔付記〕

本稿は、一九八七年国語学会秋季大会での発表用原稿に添削を加え作成したものです。御示教を賜わった先生方に感謝申し上げます。

——京都産業大学教授——

(平成二年十二月二十三日　受理)